

《特別対談》

国境を越えてゆく  
知のコミュニティとしての  
大学教育をめぐる

吉見俊哉 教授（東京大学）  
山田清志 学長（東海大学）



略歴

吉見俊哉（よしみ・しゅんや）

東京大学大学院情報学環・学際情報学府教授。東京大学出版会理事長。東京大学副学長、東京大学総合教育センター長など数々の要職を歴任。東海大学で学部長研修会の講師を務めた。専門は社会学、文化研究、メディア研究。『大学は何処へ 未来への設計』ほか著書多数。

山田清志（やまだ・きよし）

東海大学学長。ハワイ東海インターナショナルカレッジ学長など大学の国際部門で数々の要職を歴任。2009年から東海大学副学長、14年から学校法人東海大学常務理事、同年10月から現職。専門は経済法、消費者法。

——先生方はロシアのウクライナ侵攻をどう受け止められましたか？

**吉見教授** まず考えたのは、これは「スパイ」と「俳優」の戦いだということです。プーチン大統領は、権力を握ってから徹底的に情報を統制してきました。偽情報も流し、人々を操作してきた。これは、元 KGB のスパイのふるまいです。彼が囚われているのは、昔ながらのロシア帝国主義の世界観です。他方、ウクライナのゼレンスキー大統領は、情報がネット上で不特定多数に開かれていく世界にいます。アメリカの富豪の支援もあって、ウクライナからの発信は途絶えません。今回の軍事侵攻は、善玉と悪玉がはっきりしているので脚本はシンプルです。元喜劇役者の彼には演じやすい。これは違う時代、19世紀と21世紀が戦っているようなものです。この位相の差が何を意味するのか、戦争の行方を考える上で、とても重要なことだと思います。



**山田学長** ロシアの攻撃は兵器の技術的な向上こそありますが、前の世界大戦と変わりません。短期的に見れば侵攻を進めているようですが、長期的な視野で見れば、今回の侵攻でロシアに実質的な勝利ないでしょう。

**吉見教授** 21世紀になって、アメリカ、ロシア、中国の三つの超大国で、民主主義ではなく権威主義が膨張しています。私はトランプ政権全盛の頃にハーバード大学で教えていましたが、当時、トランプは絶えず問題を起こし、それ

で影響力を拡大させていました。攻撃的な身ぶりが受けるのです。

今回のロシアの行動は古典的です。戦車を並べ、アメリカが日本や朝鮮半島、ベトナムでやったような無差別空爆をまだやっています。誤爆や巻き添えで亡くなる市民が増えるほど抵抗勢力が増大します。中間的な人々も反ロシアに流れるからです。もう一つ、今回感じたのは、帝国主義のしぶとさです。武力で領土を広げるといった考え方がまだ生きている。

**山田学長** 21世紀において領土的野心に何の意味があるのでしょうか。科学技術は進歩しても、人類は進化しているのかと疑問です。

**吉見教授** 今回のウクライナ侵攻は、日本の満州侵攻に似ていると言う人が多い。1930年代、日本は世界から孤立しても、戦争への道を突き進みました。当時の日本人の大多数は、あの侵攻に異を唱えませんでした。今のロシア人と同じです。外側から、自分の位置を見直す機会を失っていました。今回、ロシアにはもっと良い選択肢があったはずで

戦争は、ロシアの未来を暗くしています。

**山田学長** 外から理性的に自分の国を見ることが出来たら、自国の選択の危うさに気がつきます。次に、選択の危うさをどのように回避して戦争を防ぐのか。覇権主義の為政者が現れたとき、その強烈な個性に影響を受けることなく対峙しなければなりません。それが出来る人々を育む。大学にはそのための手段、大切な役割がある。

**吉見教授** 外から見えることを言葉にして行動し、連帯して力にするにはどうすれば良いのか。そういうことを学ばせるのが、大学の極めて重要な役割ですね。

例えば、人文学的な視点でロシアとは、日本とは、アメリカとは何かを学ぶことです。これを深めれば、自分たちが中心で正しいという答えにはなりません。

ロシアとウクライナの関係も、もともとロシアが中心ではない。キウ大公国が東ローマ帝国の文明を伝えたわけで、ロシアは周縁でした。キウ大公国はその後、モンゴル帝国に滅ぼされ、やがてロシア帝国の覇権が広がったため、ウクライナは隷属的な位置に追いやられ、苦難の道を歩みます。

しかしロシアも、モスクワ、バルト海、ユーラシアの遊牧民、シベリアと、異なる歴史を内包しています。スターリニズム的なソ連に収斂しない歴史を掘り起こせば、単数形ではない、複数形のロシアが見えてくるでしょう。日本や中国にも、これは当てはまることです。京と東国、瀬戸内、日本海、沖縄、北方の歴史は違います。

その歴史の複数形を学ぶことも大学でやるべきことで、それを海外の人々と対話し、共有することも、本来、リベラルアーツ教育の使命です。リベラルアーツは国境を超えようか、国家に隷属しない個人を育てる教育です。

**山田学長** 私は、今回のウクライナ侵攻からクラウゼビッツの戦争論を思い起こしました。政治的問題の解決手段として戦争がある、軍備競争をする。そういう論理は極めて危険です。そういう思考を持たない個人を、リベラルアーツ教育は育むことが出来ます。教育には即効性はありませんが、漢方薬や感染防止の抵抗力のようなものと考えてもいいでしょう。ところで吉見先生は新型コロナウイルス感染症による、大学教育への影響をどのようにお考えですか。

**吉見教授** ユニバーシティ、つまり大学はそもそも12、13世紀、旅する教師と学生が、旅先の都市で学びの協同組合として作ったものです。境界を越えて旅をすることで知見を広げ、地元の政治権力と対抗する。大学は本来、国境を越えるべく運命づけられています。

全国にキャンパスがある東海大学ですから、山田先生は旅する学長ですね（笑）。学生も、今日は札幌、明日は湘南、熊本と旅して学べる環境があってもいいかもしれません。さらにハワイからアメリカの諸都市へ旅していくことだってできる。旅して学ぶと、それぞれの地域に興味を持ち、歴史を学び、経済を学びます。それをつなげれば、新しい産業が

《特別対談》

生まれるかもしれない。いろいろな人材が出てきます。大学の可能性ですね。

**山田学長** そういう人の交流を新型コロナが止めてしまいました。袋小路に入って、今回の戦争が起こった側面もあるように思う。

**吉見教授** 同感です。乱暴な言い方をすれば、コロナも戦争も反大学的です。人の流れを遮断する。興味深いことに歴史上、戦争と感染症パンデミックは対で起こっています。発生の前後は異なりますが、第一次世界大戦とインフルエンザの大流行、スペインやポルトガルの新大陸征服と天然痘による大量死、モンゴル帝国のユーラシア制覇とペストの大流行、天然痘の最初の大流行は、ローマ帝国の巨大化の後に起こりました。

感染症は、その時々の世界で、対話や交易がグローバルに活発化するとき大流行し、世界を分断します。感染予防で接触や対話、交易が止まってしまう。

そして、遮断によって妄想が膨らみ、今回で言えばプーチン大統領の妄想が現実の行動になった。遮断された世界では経済も停滞しますが、大学の学びも死にます。

大学は講義がすべてではありません。講義の情報伝達ならオンラインだけでも可能ですが、それでは大学は成立しない。いろいろな学生がキャンパスに集まって、出会い、異なる体験をすることが学びの基本です。だから、教師にも学生にもキャンパスは必要です。

**山田学長** そこで出てくるのが、反グローバル主義にどう応えるかという課題です。グローバリゼーションには格差を生む要素があります。そこに戦争や感染症が付け入ってくる。大学はグローバル化された環境で輝きを増しますが、その輝きが生む影の部分がある。

**吉見教授** 反グローバル主義は見かけ上、アメリカ中心のグローバリズムに対抗します。大学でも、今は英米中心のピラミッドが強化されています。大学の世界ランキングが実例です。しかし、そもそも大学は、多文化的で多元的な価値を持ち、異なる目線から物事を見る可能性を育てるから創造性があるわけです。それがアメリカ中心のグローバリズムに統合されていくと、創造性は失われます。

**山田学長** ロシアはフラストレーションを感じている。真の地球市民を育むグローバリゼーションとは違うぞ、という言い分がある。

**吉見教授** 冷戦の一翼を担っていたという誇りが暴力的な行動を生んだ。それで、自滅していく。残念なことです。今、私たちが考えるべきことは、プーチン後のロシアとどう付き合うかでしょう。いつになるかは分かりませんが、プーチン後は必ず来ます。

ですから、今こそ日本の大学生はロシア語を勉強すべきです。ロシアを嫌いになって勉強しないという考えは逆です。むしろ一つの時代の終わりが見えてきたからこそ、ユーラシア全体を見据えた学びが重要になってきます。

**山田学長** 国際政治のリアリストの中には、プーチン大統領の失脚でロシアが一層混乱すると指摘する人もいますが、社会が望めば改革を実現する人材は必ず出てきます。そのた

めの人材づくりをすることが大学の役割です。

**吉見教授** まったくです。プーチン政権が崩れた時に未来への可能性が生まれてきます。ロシアのいろいろな側面、地域を複数形で見られるようになってくれば、日ロ関係のネットワークも広がる。国のアイデンティティを単純に一つに収斂させてはいけません。

**山田学長** ウクライナへの侵攻が始まったとき、私は大学のホームページに侵攻を非難する声明を出すとともに、交流のあるロシアの大学学長宛に交流の継続と憂慮の念を伝える親書を送りました。何があっても交流のチャンネルだけは途絶えさせてはいけない。これまで重ねてきたロシアの人々と地道な交流を遮断してはならない。為政者が強制した国家間の分断を回復するために、学術文化、スポーツでの交流を保ち続けます。

フランスの思想家ジャック・アタリ氏が、人類の歴史上、民主主義国間では戦争は起きていないと指摘して、民主主義の重要性を唱えています。学生たちに民主主義の大切さを、気持ちを込めて伝えて行きたいですね。